



Title	接尾辞「性」の発生と歴史的展開
Author(s)	沙, 広聡
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2021, 3, p. 50-53
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79347
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

接尾辞「性」の発生と歴史的展開

日本語学 博士後期課程 1 年
沙 広聡

1. はじめに

接尾辞「性」は専門領域でも日常生活でも多用される造語法の 1 つである。従来の研究によれば、「性」の接尾辞的用法は 19 世紀前半の蘭学資料に現れ、大正時代に定着したことが分かる。しかし、それが具体的にどのような経緯を経て発生し成立したか、またその要因が何かはまだ不明である。本稿は、これらの疑問を出発点とし、各時代の用例に基づいて接尾辞「性」の成立過程を明らかにする。

2. 先行研究と問題点

接尾辞「性」の歴史研究として、朱京偉（2011）、楊超時（2017）、野村（1981）が挙げられる。これらの研究によれば、「漢字 2 字＋性」の造語は 1830 年代の蘭学資料に見られ始め、大正時代から英和辞書に登録されるようになったという。

しかし、先行研究の問題点として、以下のようなことが挙げられる。

第 1 は、蘭学が始まる前の「性」がいかに関使用されていたかという問題である。第 2 は、日本語における接尾辞「性」の発生過程及び要因である。第 3 は、江戸時代の蘭学から明治時代の英学への転換の中で、「性」の接尾辞的用法はいかに関明治の人々に受け入れられ、発展していったのかという問題である。

さらに、先行研究の多くは「漢字 2 字＋性」だけを対象とするが、接尾辞「性」の歴史を追究する時に、「性」を後部要素とする語ないし「性」が 1 語として機能する状況も考察範囲に入れて検討すべきではないかと思われる。

3. 蘭学以前の使用

国文学研究資料館の日本古典文学大系本文データベース、『日本国語大辞典』、国立国語研究所の日本語歴史コーパス（CHJ）を利用して蘭学以前の「性」の使用状況を確認する。「性」で終わる語の中には漢籍由来のものが多いため、ここでは漢籍の出典状況に基づいて、用例を次のようにまとめる。

表 1 18 世紀以前の「漢字 1 字＋性」（63 語）

典拠のある語 (44)	天性、百性、根性、情性、悪性、習性、薬性、稟性、養性、心性、本性、陽性、生性、素性、賦性、五性、火性、金性、木性、土性、気性、記性、癖性、慧性、俗性、恒性、悟性、才性、資性、湿性、蛇性、真性、人性、水性、体性、血性、鳥性、仏性、靈性、烈性、毒性、無性、同性、実性
典拠のない語 (19)	女性、相性、虚性、不性、雨性、互性、字性、煖性、食性、短性、猫性、非性、目性、庸性、利性、甲斐性、くまで性、熊手性、くろう性

表1が示す通り、63語のうち、7割程度は漢籍由来の言葉である。残り19語は漢籍にない語で、日本人独自の造語と思われる。

63語を見渡してみれば、以下のようなことが分かる。

まず、「性」の読みはセイとショウの両方があり、日本人独自の造語である19語だけを見れば、読みがショウである割合がさらに高くなっている。また、この19語の出典について確かめたところ、浄瑠璃・仮名草子・雑俳など、庶民文学の作品に集中していることが分かった。これは、遣隋使・遣唐使によって持ち込まれ、のちに正音と推奨された漢音よりも、受容時期が早い呉音のほうが当時の一般人にとって馴染みがあったからではないかと考えられる。また、意味の面から見れば、「～性」には「物事の性質」を表す語もあるが、「人の性格・本性」を表すものが大多数である。例えば「悪性」は「性格が悪い、身持ちが悪い」という意味を指す。

4. 蘭学資料における接尾辞「性」の発生

17世紀から18世紀中期までの蘭学資料は、多くが西洋の薬品に関するものである。これらの書物では「性」が頻繁に使用されており、「熱性」「平性」「燥性」「大熱性」「微温性」「湿温性」など、多くの用例が確認された。

「熱」「平」「微温」などは中国の本草学用語で、実際漢籍で確かめたところ、「性熱」「性平」「性微温」などの表現が数多く見受けられる。このように、漢籍では「性～」のような句型が広く通用されるのに対し、蘭方書では「～性」という造語パターンが作り上げられた。

18世紀中期以降、解剖学を始めとする多岐にわたる専門分野の著書・訳書が世に出された。この時期に出版された書物の中には、「性」による新たな造語が見られた。

表2 19世紀以降の蘭学資料における「～性」

	資料名	用例		
		N 型	V 型	A 型
1814 (文化 11)	吉田成徳訳 泰西熱病論	石鹼性、石灰性	熱性	悪性
1820 (文政 3)	宇田川玄真訳 宇田川榕菴校集 和蘭薬鏡	鉄性、瘰癧性	寒性、腐敗性	悪性
1822 (文政 5)	宇田川玄随訳 藤井方亭増訳 増補重訂内科撰要	亜児加利性	熱性、清涼性	悪性、善性
1822 (文政 5)	宇田川玄真 遠西医方名物考	鉄性、酸性、胆液性、抜爾撒謨性、亜児加利性	熱性、瘧性、清涼性、痙攣性、腐敗性、焮衝性	悪性、良性、固性消石
1827 (文政 10)	青地林宗 気海観瀾	(なし)	碍性、引性、発燄性、防腐性	(なし)
1837 (天保 8) - 1847 (弘化 4)	宇田川榕菴 舍密開宗	酸性、磁性、機性、植性半酸、華爾斯性越力、玻璃性越力、拔塞斯性	和性、蝕性、爆性、和水性、褪色性、延張性、可溶性	中性、苛性、緩性、強性、悪性、剛性

「V+性」に関して、次の例が興味深い。

硬氣^ニ有^レ防腐^性、木炭亦然、是以炭末^ニ貯^レ肉^ヲ、勝^ニ於^ニ塩藏^ニ。

(青地林宗訳『氣海觀瀾』、1827 (文政 10) 年)

ここの「防腐性」は訓点の示す通り、「腐るのを防ぐ性」という意味である。また「防腐」の出典を確かめたところ、漢籍には見当たらなかったが、杉田立卿が訳し林宗が校正した『黴瘡新書』(1821 (文政 4)) には「防腐水」があり、『遠西医方名物考』には「防腐」がある。したがって、この語は蘭学者が漢語の語順——「述語＋目的語」——で作った和製漢語と考えられる。そして林宗が「防腐」の後ろに「性」を付け加えて「防腐性」を造出したのである。

『氣海觀瀾』が出版された 10 年後、日本初の近代化学書『舎密開宗』が世に出された。漢文訓読体で書かれたこの本の中で、同じ訓点付きの用例が見られた。

按^ニ皿内留物中、亜爾箇兒^ニ可^レ溶性^性ノ塩類ヲ溶ス工夫ナリ滌後再ヒ秤量シテ其塩、亜爾箇兒^ニ溶タル分量ヲ知ル。

(宇田川榕菴『舎密開宗』、1837 (天保 8) ～1847 (弘化 4) 年)

「防腐性」も「可溶性」もその前部要素における結合関係から見れば、いずれも日本語と異なる、漢語の語順で作られた和製漢語である。これらの造語は、はじめ意味理解の上では漢文の知らない一般人に訓読されていたであろうが、直読されることによって次第に 1 語として確立し、その後日本語の中に定着したと考えられる。

5. 明治以降の接尾辞「性」の展開

「性」に関する訳語としてまず西周『生性發蘊』(1873 (明治 6)) の「^{リーゾン}理性」がある。振り仮名が示すように、「理性」は *reason* の対訳語である。漢籍にも「理性」という漢語があるが、現代語とは異なり意味は「本性」に近い。西は古典語の「理性」に「道理ヲ知ルノ性」という新しい意味を付与し、それを英語の *reason* の訳語に使ったと思われる。似た用例として「靈魂一元論」(1870 (明治 3) 頃) には「覚性」「感性」「作性」があり、それぞれ *perceptibility*、*sensibility*、*action* の訳語である。

また、「漢字 2 字＋性」の用例として次の「自愛性」「他情性」が挙げられる。

夫^{ウイ}生^{アツ}体^{ヘキ}ノ情^{チウ}ハ別^ニテトナス、第一^ニ自^{ベル}立^{ソナリ}ノ情^チ、第二^ニ為^{ソシ}群^{アザリ}ノ情^チトナリ、動物ノ下等ナル者ニ於テハ唯第一ノ者ヲ現ハシ、第二ノ者ハ雌雄ノ別備リテヨリ初テ現ハレ、動物ノ上下相連ナル階級上ニ於テ其階級ノ上ル度ニ從テ漸次ニ強クナリ (中略) 今、之ヲ名ケテ自^{エゴ}愛^{ワズム}性^ム 他^{アル}愛^{トル}性^{イズム}ト称ス。(西周『生性發蘊』、1873 (明治 6) 年)

例文で示したように、西は最初に「自立ノ情」と「為群ノ情」という句を使っていたが、のちにこれらをそれぞれ「自愛性」と「他愛性」という語に書き換えたのである。漢文体で書かれた『原法提綱』(1877 (明治 10) 年前後) では「特殊之性」「確定之

性」「道德之性」があるが、1890年代の『哲学雑誌』や『女学雑誌』などを見れば、いずれも助詞が脱落し、「特殊性」「確定性」「道德性」となっている。これと同じく、『美妙学説』（1877（明治10）前後）に「感受ノ性」「感受スルノ性」とあるが、『哲学字彙』（井上哲次郎、1881（明治14））ではそれを「感受性」に変えた。

興味深いことに、西の著書には「有機性」「無機性」といった江戸蘭学の造語もたくさん登場している。明治時代の人文科学系の書籍に現れた接尾辞「性」の用例の中には、蘭学から直接継承されたものもあれば、蘭学の造語法を用いて新たに作られたものもある。

CHJに収録された日本最初の総合雑誌『太陽』（博文館、1895（明治28）～1928（昭和3））の1901年のデータを検索したところ、接尾辞「性」による造語はすでに50種以上存在し、接尾辞「性」は日本語の中で当時すでになりに普及していたことがわかる。

6. おわりに

以上、日本語における接尾辞「性」の発生及び展開について見てきた。考察の結果については、次のようにまとめられる。

まず18世紀中期以前の蘭方書では薬性を表す「漢字2字+性」の造語が作り上げられた。これは従来の本草学における「漢字1字+性」「性+漢字2字」から発展したものと考えられる。18世紀中期以降、蘭学が盛んになるにつれて、「性」は薬物の記述にだけでなく、物質・病気などの記述にも頻繁に使われるようになった。「性」の用例に関して、最初は文・句レベルの表現が多かったが、その後徐々に簡略化され、語彙レベルの用例が現れた。そして1820年代から「性」は複合語の後部要素として頻繁に使われるようになり、その後1種の造語法として蘭学者の間で普及した。

江戸時代の蘭学から明治時代の英学への転換が進む中、接尾辞「性」の使用が自然科学から人文科学へ及んだことが観察された。

「性」による複合語の前部要素には、漢籍からの借用語と蘭学者が自ら作った和製漢語とがある。後者の中には「防腐」「可溶」など中国語の語順で作られたものもある。これらの漢語に訓点が振ってあることから、当時の日本人はおそらく訓読して意味を理解していたと思われる。しかし意味の理解として訓読するものの、中国語の語順を変えずそのまま音読することによって「～性」が1語として初めて成立したと考えられる。

参考文献一覧

- 朱京偉（2011）「蘭学資料の三字漢語についての考察：明治期の三字漢語とのつながりを求めて」『国語研プロジェクトレビュー』第4巻（国立国語研究所学術情報リポジトリ）
- 杉本つとむ（1977）『江戸時代蘭語学の成立とその展開Ⅱ—蘭学者による蘭語の学習とその研究—』（早稲田大学出版部）
- 野村雅昭（1978）「接辞性字音語基の性格」『電子計算機による国語研究』第9巻（国立国語研究所学術情報リポジトリ）
- 野村雅昭（1981）「近代日本語と字音接辞の造語力」『文学』第49巻（岩波書店）
- 楊超時（2017）『近代中日詞彙交流与“的”“性”“化”構詞功能的演变』（中国社会科学出版社）